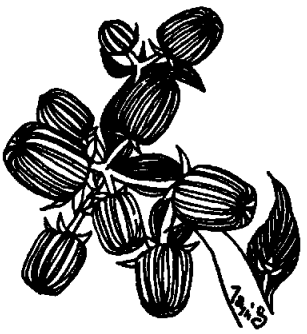

世界的に見る環境問題

――WCSをめぐって②――

藤原英司

ユネップ

世界自然資源保全戦略（WCS）を理解するためには、この戦略書の表紙に書かれているユネップ（UNEP）のことを把握しておく必要がある。ユネップはこの戦略書を世に送りだした他の二つの機関――IUCNとWWFと肩を並べて戦略書の共同策定者の立場にある。IUCN（国際自然保護連合）とWWF（世界野生生物基金）は、ともに英語略字を一字ずつそのまま読む。つまりIUCNはアイユーシーエヌであるし、WWFはウーフではなく、ダブリューダブリューエフである。だがUNEPはどういうわけか一般にユネップといわれる。ユーエヌイーピーと言ってもべつに誤りではないが、私の知る限りでは今までそういう読み方をする人には会ったことがない。ユネップは国連の一機関であるが、国連の機関にはユネスコ（UNESCO――国連教育科学文化機関）やユニセフ（UNICEF――国連児童基金）のように略号を一つの単語のように読む機関がある。しかしすべての国連機関の略号がそういう読み方をするかというと、そうとも限らない。ILO（国際労働機関）はイローやアイローとはいわず、アイエルオーといいならわされていることは周知の通りだ。そうかと思うとFAO（食糧農業機関）のように、エフエーオとファオの二つの読み方が通用しているものもある。

いっぽうユネップ（United Nations Environment Programme）の日本語表記は〝国連環境計画〟で、一般に時々見かける〝国連環境計画事務局〟とか〝国連環境計画事務所〟といった表記は便宜的なもので、日本の国連事務局で用いている表記にはない。しかし、事務局とか事務所という表記をさいごにくっつけたくなる気持もわからないではない。なぜならば、国連環境計画といわれると、国連が作った環境についての計画書のように思われるからだ。これは自然保護関係者でも国内の活動だけに携わっている人々の間や、国際的な自然保護問題を少しかじった人々の間によく見られる誤解である。例えば、つぎのような会話を時たま耳にするのは私だけではあるまい。

「国連環境計画のことだけどねえ」

「うん、うん、あれか。ありゃあ、国連としてはよくできた計画だよな。なかなか緻密だよ。」

この応答は、明らかにユネップのことを国連が作った計画書の一つのように考えているとみていいだろう。だがユネップは、単なる国連の計画書ではなく、環境計画を推進する独立の機関なのだ。つまり、ユニセフやユネスコと同じ専門機関である。

ユネップについては、もう二つ、一般に誤解がみられる。その一つは、国連機関の中で機関という名称をもたないのはユネップだけだという考えだ。これは明らかにまちがいで、ほかにも国連開発計画（UNCTAD）や、世界食糧計画（WFP）のように〝計画〟の表記をもつ独立機関がある。そもそも国連の機関は、必ずしも○○機関と称されているわけではなく、協会、公社、基金、連合、会議、センター、事務所、研修所など雑多な表記の機関があり、国連大学のように大学の名称をもつ機関もある。

ユネップについての今一つよく見られる誤解は、これが国連の創設当時から存在した機関の一つだと思われていることだ。もっとも、最近は、この点については、だいぶPRがゆきとどいてきて、一九七二年のストックホルム会議で創設がきまったということを知っている人が多くなった。だが、「ストックホルム会議って何だ？」という人は依然として多い。そこでユネップを理解するために、まず、ストックホルム会議と、この会議が催されるようになった背景を述べる必要があるだろう。多少遠まわりでもWCSやユネップを理解するには、これが一番いいように思う。歴史的な順序としてはIUCNとWWFの成立のほうが先行するので、この二つの団体の成立を含めて、国際的な自然保護の動きをかけ足で見ておくことにしたい。

切り抜き会社

日本の国内各地で自然保護運動が大きな高まりを見せたのは一九七〇年代で、これは自然保護の活動家でなくても、今日の大部分の人々が自身の体験として肌で感じたことである。この年代のわが国での自然保護への関心の高まりは異常な熱を帯びたもので、私は当時のとまどいを今でもありありと思い浮かべることができる。一九五〇年代から海外で刊行される動物や自然ものの作品の翻訳や紹介を始めていた私は、海外――とくに英語圏での自然関係の刊行物の中に、自然保護をテーマにしたものがかなりあることに気づいていた。

今日では海外でどのような刊行物がでているかということを知るのはそれほどむずかしいことではない。海外刊行物の版権取扱会社や洋書の輸入業者が海外での新刊書のリストを作成して配布しているし、海外の雑誌や新聞をとり寄せることもずっとスピーディになり、公共図書館へ行けば、海外の刊行物情報に接することも容易になった。つまり、国際化時代といわれるように、海外情報へのアクセスが当時よりずっと楽になり、日本にいるからアメリカの出版物のことがよくわからないというようなことはなくなった。

しかし、一九五〇年代から六〇年代のころというのは海外の情報を集めるのがひと仕事で、私は当時日常の仕事の合間にせっせとタイプを打ってはいろいろな出版社や関係先に出版資料の提供を頼んでいた。やがて送られてくる資料の中に面白い広告を見つけた。新聞の切抜きを代行しますという広告で、関心のあるテーマを通知すれば、そのテーマにかかわるあらゆる新聞記事を切り抜いて送ってくれるというものだった。今日では、日本でもこういう業務が見られるようになったが、当時は海外でも珍しい業務のようだった。広告をだしていたのはイギリスの会社で、当時イギリス国内で発行されていたあらゆる新聞について、記事の切り抜きサービスをするというのだった。

私はこの広告にとびついた。動物と自然ものに関する書評広告の記事をすべて切り抜いて送ってほしいと申し込んだのだ。ワン・カッティング（一回の切り抜き料）がいくらだったか忘れてしまったが、とにかくそれはけっして安くなかった。しかし当時、海外の情報蒐集のため、のべつタイプライターを打ちつづけていた私は、その労力と費用とひきかえなら十分に見合う報酬だと思った。じっさいそのころは、一日の仕事が終ると、夜の時間はたいていタイプを打っていた。私は文筆専業になる前に商社の貿易部に勤めていたので、毎日のように英文タイプを打っていた。だから簡単な用件の手紙なら草稿を作らないで、直接タイプで打ち出す作業にもなれていた。したがってタイプ打ちそのものはたいして苦にならなかったが、そのための時間は、できれば別のことにふり向けたかったし、でき上った手紙をだすための航空便代もばかにならなかった。

切り抜き会社の利用は、これらの問題から私を解放してくれたし、何よりも広範囲な情報が蒐集できた。それに新聞の書評にとりあげられる書物というのは、刊行物のうちでも一定のレベルに達したものや問題作が多いので、じっさいにその本を買うかどうかの目やすをつけるのに大層役立つことが多い。出版元からの情報というのは、どうしても誇大宣伝が多く、刊行物の実質的価値を判断するのにつごうが悪い場合が多いが、新聞書評の情報には、手前ミソの広報文は少ないので、刊行物の内容判断に際しては威力を発揮した。

発行された本の内容吟味は、私にとって重要な意味をもっていた。というのは、内容がどういうものであるかによって、その本を買うか買わないかをきめるからで、もし、買うときめると、それにまつわる次の段階の作業が、いろいろ発生することになる。つまり送金為替の作成と発注、そして到着後は内容を通読し、サマリーを作り、版権関係を処理し、日本の出版社を捜し、出版契約を結び、翻訳にとりかかるという一連の作業が発生するわけだ。

本に追われる

こうした書評の切り抜き購入は何年か続いたが書評で取りあげられる本は当然のことながら大人物から子供物、写真集、美術書、論文集など多方面に及び、私はその一つ一つをたんねんに読んで、どの本を買うかを決めていった。当時のわが国はちょうど経済の高度成長期に当たり、私も今よりずっと金まわりがよかったので、面白そうだと思う本を片っぱしから発注した。当時でも東京の丸善では洋書の海外発注業務をやっていたので、急がないものは丸善へ頼み、急ぐものは自分で直接版元へ発注した。ところがそうやって発注して入荷してくる本を見ると、自然保護関係のものがじつに多い。英語版の本というのはたいてい英語圏の各国、つまり、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリアなどで同時発行されたり、これらの国のどれか一国で発行されたものが、後日、他の英語国で発行されることが多い。また、非英語国で発行されたもの―例えばドイツ語やフランス語、イタリー語の本などでも、問題作は、たいして月日をおかずに英語での翻訳版が出ることが多い。したがってイギリスの切り抜き会社から書評記事を買って見ていると、居ながらにして世界各地の主要な出版情報をつかむことができた。

だが、こうして購入した洋書の原本が、すべて私の要望にかなっていたかというと、そうでもない。第一に到着してみて大部分が写真ばかりのフォト・エッセーみたいなものだったり、大人物と思って買ってみたら子供物だったり、あるいはその逆であったり、硬い内容のはずが軟らかかったり、ノン・フィクションのはずがフィクションだったりというアテはずれが、けっこうあった。しかし、こうしたズレはまだいいとして、一番アタマにくるのは全く同じ内容の本がタイトルを変えて、英語圏の異なる国で発行されたものがあることで、それを知らずに買ってしまうことだった。

そのうちにもっと憂うつなことが二つおこった。一つは、つぎつぎとどく本のために本棚がパンクし、いくら本棚をふやしても収容しきれず、玄関先から居間はいうに及ばず、台所から階段、二階へと本置場が拡大され、ついに一階も二階も土台の根太がさがりだしたことだ。このため大工を入れて家を補強するはめになった。当時は日本語の本もかなり積極的に買い集め、時には一つの店の自然関係の本棚をガラあきにしてしまうような荒っぽい買い方をしていたので、自宅の本棚ばかりでなく、家そのものがパンクしそうになった。事実、やがて家はパンクして買いかえたが、もう一つの憂うつというのは家の買いかえではなく、買った洋書や和書を、はじからむきになって読もうとしたことからくるストレスだった。

本や文献というものは必ずしも読む必要はなく、じっさいに参照する必要がおこった時にすぐとりだせるように所在を確認しておけばよいということは、国立科学博物館での研究室生活で心得ていたが、金と労力をかけて買いこんだ文献というのは、どうしても中味を読んでみたくなる。いや、もっと正確にいえば読まなければソンをしたような気になるのだ。ところが、本はあとからあとからくる。読んでも読んでも追いつかない。たえず新着の本に追われつづける毎日で、気の休まる暇がなかった。しかしこの時期にはからずも洋書の速読技術を、自己流ながら身につけたことはたしかで、これはのちに海外の文献を渉猟して何か作業をすすめるのに役立つこととなった。

IUPN

さて、WCSと関係のない余談をつづけてきたが、じつは以上に述べてきたことは、けっして本稿と無関係な余談ではない。なぜかというと、一九五〇～六〇年代にかけて欧米では、わが国に先がけて自然保護への関心の高まりがあり、私はそれを日常生活の中で実感していたが、外交官でもない私が、なぜそのころの海外の動きを知っていたかという手のうちを読者に知らせるには、こういう楽屋話が手っとり早いからだ。

当時買いこんで読んだ動物ものや自然関係の洋書の中に、ひんぱんに出てくる二つの活動団体があった。それが、本稿のWCSを作成した中心組織体IUCN（国際自然保護連合）とWWF（世界野生生物基金）だった。IUCNは一九四八年十月五日に設立された団体で、WWFがスイスで設立されたのは、これより十三年あとの一九六一年である。いずれも私が海外の自然関係の出版活動探索を集中的におこなっていた時期と一致しており、手元にとどく文献の中にこの二つの団体の活動やキャンペーン記事が年を追って増大していった。最初はずいぶん長ったらしい名前の団体だというのがIUCNについての印象だった。因みにこの略号は、International Union for Conservation of Nature and Natural Resourcesで、そのまま訳せば「自然と自然資源の保護についての国際連合」であり、略号も正確にはIUCNNRでなくてはならない。IUCNは設

立の当初ＩＵＰＮ（International Union for the Protection of Nature）と称されたが、一九五六年のエジンバラの会議で、今日のＩＵＣＮの呼称に変えられた。だが略称は途中のＰをＣに変えただけにとどまった。しかしこのフル・ネームは、いかにも長すぎるという意見があり、一九八二年にもＩＵＣＮの理事会で名称の変更が議題にのぼった。しかし長すぎる名前でも、今やその知名度は国際間に広くゆきわたっており、今のままでいいではないかということで据置きとなった。

ＩＵＣＮについては、私自身、最初のうちは、たいして気にもとめなかったが、あまり何度も出てくるようになると、また出ている、またまた出ているということで注目するようになり、この歴史や活動について少しずつくわしくなっていった。この団体は今日では国際的にもっとも権威ある自然保護団体とされているが、それはこの団体が結成された歴史の古さと、この団体のもとに集結された世界中の科学者と上流階級の層の厚さ、それに政府機関と民間団体の双方が仲よくメンバーになっているという特異性、さらに科学的に質の高い各種の学術報告を刊行する実力をもっているからだ。

ＩＵＣＮの結成は前述の通り一九四八年で、歴史的にはけっしてそれほど古いといえるものではないが、この団体にはＩＵＰＮの前に、ＩＯＰＮという前身がある。ＩＯＰＮは International office for the Protection of Nature の略で、訳せば自然保護国際事務所だ。つまり自然保護を国際的な規模で進めようというわけで、これはＩＵＰＮより二〇年前の一九二八年に作られた。一九二八年は昭和三年に当たる。わが国では治安維持法が改正され、悪名高い特高（特別高等警察）が新設されて、軍国主義色が一段と濃厚になりだしたころだ。公害史の上では三井鉱山の鉱毒による稲作減収が一九二〇年におこっているが、ごく限られた地域での問題で、一九六〇年代のように、公害があっちでもこっちでもという時期ではない。

ヨーロッパやイギリスでは産業革命（一七六七年）以降、重工業の発展が著しく、ヨーロッパでもこの傾向は同じで、早くから自然の汚染や破壊が問題になっていた。とくにヨーロッパでは同じ大陸にいくつもの国家があり、それぞれの国家が独自に生産活動や開発をすすめていて産業廃棄物や環境破壊の影響が近隣の諸国へ波及することが早くからおこりはじめていた。つまりヨーロッパでは近隣関係が即ち国際問題であり、自然環境の汚染をどうするかという場合、それを国際的に考える必要があるという考えがずいぶん早くからおこったわけだ。したがってＩＯＰＮ設立の構想も一九一〇年にスイスでおこっている。つまり国際的自然保護機関を作ろうという考え自体は、ＩＯＰＮの設立より十八年前にすでにあったということである。これをＩＵＰＮの設立年次からみると、設立の三十八年前から構想されていたことになる。ＩＵＣＮが歴史的に暖簾（のれん）の古さを誇る団体だというのは、このゆえである。それにしても初期の構想からＩＵＰＮの設立まで三十八年間もたっているということはなぜだろうか。これは世界史のイロハに属することだが、この三十八年間に、世界は文字通り激動しつづけ、第一次と第二次世界大戦、ロシア革命、辛亥革命、世界大恐慌、スペイン内乱、日華事変、満洲事変、太平洋戦争などが息つくまもなく発生した。自然環境をどうするかということより、いかにして自分たち人間が今日明日を生き残るかというほうに人々の関心が向いていて、ほかのことに気を配るゆとりなどなかったというのが世界の実情だったのだ。

金さえあれば

一九五〇年代から六〇年代のＩＵＰＮとＩＵＣＮというのは、わが国では、ほんのひとにぎりの人々にしか知られていない存在だった。しかし海外からとどく各種の自然関係の文献には、この団体のことや理念がくりかえし登場し、とくに一九六一年にＷＷＦ（世界野生生物基金）が誕生してからは、理念キャンペーンに一段と拍車がかかった。

ＷＷＦの理念は端的にいえば、自然を守るためには金がいる、その金を集めようということから発している。この考えはＩＵＣＮの活動の中ですでに誰もが気づいていたことだ。日々悪化していく自然を何とかするためには、まず自然の状態がどうなっているのかを調べなくてはならないが、調べるには人がいる。人がいてもその人が調査している間のその人自身の生活費がいる。またその人が現地を調べに行く旅費がいる。調べたことをまとめて刊行する印刷費がいる。次いで、できあがった刊行物を、しかるべき所へ発送する手間と郵便代がいる。発送を終えると、やがてその刊行物を読んだ人々から、いろいろなことを言ってくる。だからその来信に答える人がいる。その人の手間や生活費をどうするか……。

これらは今日の自然保護団体と関係者が等しく体験している悩みだが、こうした問題を一挙に解決しようと思えば、いやでもゆきつくのが金銭である。金さえあれば、とい

う歎きはいつの時代のどの分野でも同じだが、自然保護の分野では、この悩みは特に深刻である。なぜか。それはこの分野の活動が金をくうだけで、他の産業や商業部門のように金をつぎこめば、やがてそこから金が産みだされてくるということがないからだ。金は使ったら使いっぱなし。それでいて金を使うことはあとからあとから際限なくおこる。そんな間尺にあわないことをしようとすれば、唯一の解決策は、余暇に頼るほかない。つまり生活を維持する定職を別に持ち、余暇ができたら自然保護活動をやるというやりかただ。しかし、これもやがて限界がくる。ＩＵＣＮがほぼ十年の活動を通じて実感したのが、まさにこのジレンマだった。

折からこのジレンマに拍車をかける猛烈な動物殺しの情報がイギリスやヨーロッパの自然愛好者にもたらされた。それはイギリスやヨーロッパの諸国が領有するアフリカの植民地での大型野獣のすさまじい殺戮だった。アフリカより先にイギリスやヨーロッパの大型植民地としてスタートした北アメリカ大陸では、すでに各種の野生動物を絶滅させたり、絶滅まぎわまで追いこんでいたが、それと同じ事態がアフリカ大陸を舞台に起きようとしていた。

アフリカでの野獣殺しに鋭い警告を発したのは、イギリスの生物学者、ジュリアン・ハックスレー卿である。彼は同じく生物学者であったトマス・ヘンリー・ハックスレーの孫で、トマスが進化論で社会的に知られた有名人であったことも手伝い、自らも文筆と科学の才に恵まれていたことやロンドン大教授、国立科学研究所教授も勤める社会的実力者であったことから、彼の発言は社会の注目を集める力があった。だから彼がザ・オブザーバー紙上でアフリカの野生動物が危機に瀕していることについて警告を発したことは、関係者の注目を集めた。のみならず、それはＩＵＣＮ関係者達のジレンマの火にも油を注いだのだ。ＩＵＣＮのジレンマは、当時の他の自然保護関係者のジレンマでもあり、同憂の士はその悩みの解決をめざして一堂に会した。集まったのはＩＵＣＮやイギリスの自然保護委員会（The Nature Conservancy）イギリス鳥類学者連盟（British Ornithologists Union）などの人々だった。

これらの人々は、こもごもに現状を憂い、将来を懸念し、世の中の無知蒙昧を歎く同憂の士であり、自然保護活動のジレンマを肌で体験している人々だった。人々はいろいろに語り合ったが、その論旨はおよそ三つに要約できそうだった。

つまり、第一に金がなくてはどうにもならないということで、とにかく何とかして金を集めようということ。第二に金をだしてもらうには、自然保護の重要性がわかっていなくてはならないが、それが一般にはわかっていない。わかっていないなら、わからせることがだいじだというわけで、それをやろうではないかということになった。しかし考えてみれば、自然保護の大切さは一般の人にわからせるだけではだめで、子供時代からしっかり教育の中に組みこんでいかなくてはならない。つまり自然保護教育をやらなくてはいけないというわけで、これが第三のテーマとなった。

こうしたわいわいがやがやをテーマ別に整理すると、第一の金のことについては〝自然を守るための資金集めとその配分事業〟ということになり、第二は〝自然保護についての認識を高める広報、啓蒙活動〟。そして第三のテーマは〝自然保護教育の推進〟ということになる。そしてこれらの具体的な目標のもとに世界的に資金集めをして活動する団体を作ることに決まり、一九六一年九月十一日にスイス法のもとに設立されたのがＷＷＦであった。ＷＷＦは設立の当初からＩＵＣＮとは姉妹関係にあり、設立当初もその後も、事務所は長い間ＩＵＣＮの中にあった。

（つづく）

（作　家）